

III 実 践 例

小学部教育課程の概要

友だちの中で、よろこんで取り組む子

小学部主事 川 上 尚 作

はじめに

小学部の児童は、13名である。ダウン症、自閉症、てんかん、多動、言語障害などと障害が重度化、重複化し、しかも、その幅が広い精神薄弱児である。これらの児童達は、生長の過程で通らなければならぬ生活体験、対人関係、運動機能などを放置され、欠落したままで現在をむかえていることが多い。そのために、認知能力、知的発達、身体的（運動）発達に偏りや遅れが著しく現われている。ひとりひとりの障害の実態を的確に把握し、それを克服していく教育が期待されるわけである。

【1】小学部の教育課程編成の基本姿勢

精神薄弱教育の目標は、児童・生徒達が成人に達するまでに、障害の程度およびその能力に応じた自立をとげ、対人関係をできるだけ円滑にし、自分自身を表現する能力を身につけ、可能なかぎり楽しい人生を送ることができるようにすることだと考える。

そこで、小学部としては、「友だちの中で、よろこんで取り組む子」を目標にかかげている。遊びや学習の中で意欲的に楽しく取り組みながら、日常生活に必要な基本的なことがらを身につけさせることをねらっている。

児童達は、知能が低くばかりでなく、運動能力も劣り、自己中心的で固執性、依頼心（甘え）が強く、逃避的になり易い。その上、多動であったり情緒が不安定で学校生活に適應しにくい面を多くもっている。このような実態の児童の指導は、日常生活の中で起こる動きやことばに直接かかわって、しかもより具体的な内容でなければ、生きて働く力とはなり難い。したがって、教科中心の教育ではなく、生活そのものを中心とした学習指導の展開となるわけで、主として、生活単元学習で行っている。生活単元は、児童の生活に密着したものであって、興味、関心があり、ひとりひとりの児童が生かされ、しかも協力して集団で取り組めるものでありたい。そして、単元終了の時点で、やりとげた、できたという満足感が十分味わえるものであって、またやりたいという意欲につながり、日常生活に生かされるものでありたい。

生活単元の主な内容は、次のようなものである。新入生を迎える会、炊飯遠足、七夕発表会、宿泊学習、運動会、いもほり大会、学習発表会、クリスマス会、ゲーム大会、6年生を送る会などで行事と関連づけて学習している。なお、個別に、クラス毎に、3クラス合同でというように学習形態も刺激があって、より楽しいものとするよう工夫している。

生活単元学習をより科学的、系統的に補うために本校では、以前から段階別教育内容表を作成し実践している。教育内容表は、4つの分野と6つの段階から構成されている。

分野としては、自立化（基礎的な生活習慣を身につけるとともに、健康で安全な生活に必要な技能、態度を養う）、社会化（身近な集団生活に参加する態度を育成するとともに社会生活に必要な知識、技能を養う）、表現化（身近な経験、活動を通して、情緒的、身体的、言語的、記号的な表現活動を引き出し、必要な基礎能力を養う）、職業化（職業人としての知識、技能、態度を養う）である。さらに、小学部から高等部まで、知的成熟、発達を考えて6段階の目標が設けられている。小学部は、3段階までをめやすとして指導にあたっているが、必ずしも高学年だから3段階だというわけでもない。障害の種類と程度によってもあつかいが変わるが、より細かい点まで配慮して指導にあたるようにしている。

【2】研究テーマと小学部の取り組み

児童の発達と障害を的確に把握したのち、個々人に応じた仮説をたて、個人目標を設定して指導にあたるようにした。個に視点をあてた事例を中心に研究をすすめるが、個人目標の設定、指導の手だて、評価について学部で全員の教師で検討し共通理解、共同研究となるよう合同の場をより重視した。

指導形態としては、前年度より引きつづき個別学習、クラス学習、3クラス合同の学習のそれぞれの特性を生かしつつ研究をすすめた。

知的障害だけでなく、言語、機能、情緒などいろいろの障害を有する児童であるから、指導にあたっては、より具体的に、しかも細分化した段階で、興味、関心を持続するよう配慮した。また、児童それぞれに見通しをもって安心して学習に参加できるように、指導内容をパターン化し、くり返しながらい指導するようにした。見通しがたち、くり返しをすることによって生き生きと学習に参加することをめざした。

障害に応じて、朝の1校時を個別指導、日常生活指導、課題学習にあて重点指導のできるよう配慮した。この子達の障害の偏り発達の遅れをなおし、発達をより促進させるには、個性的な指導と総合的な指導（客観的）の両面よりせまっていくことが重要だと考えた。

【3】実践研究の課題

特に障害児の指導は、教師と児童の関係が安定して信頼度が密でなければ児童の変容は考えられない。以下の事例発表の中にも見られるが学校で学習、指導した内容が家庭でも生かされるよう保護者との一貫した連携を保つことは、児童の変容発達のために効果が期待できる。又、そのことは、教師と児童の関係を一層親密に保つことができるので今後続けていきたい。

児童の障害を的確に把握し、いつでも、どこでも、だれでも、発達と障害に即して総合的、有機的に適切に指導できるよう共通理解の場を作り研究を続けていく必要がある。そのためには、常に新鮮な目で児童を見つめ、児童ひとりひとりの願いを自分のものとして考え続け、意図的に客観的に記録を収集し、総合的に見つめるようにしていきたい。

ひとりの教師の研究に終始することなく、共同で対処できるような、また、1年間のみというような短期なものではなく、生涯にわたって見つめられるような息の長さをもって取り組んでいきたい。